

「家族を選ばせてください」

総合商社に入社以来、留学、駐在、出張と国内外を飛び回った。鉄鋼部門を担当し、自他共に認める「出世コース」を歩んできた谷川さん。いよいよ海外支配人の声がかかったのは、五十歳の働き盛りだった。しかし谷川さんは行き先も聞かずに辞退した。

理由は、その直前に乳がんの手術を受けたばかりの妻・孝子さんだった。学生時代から八年越しの交際で結ばれ、誰よりも信頼している妻が病氣と闘うときに、谷川さんはそばにいたいと思ったのだ。

「家族を選ばせてください、と言いました。だって、それまでの順調な会社生活も、息子たちがちゃんと育っていたのも、ぜんぶ妻のおかげだったから」

闘病の末に旅立った孝子さんを見送り、絶望のなかでこれからの人生を考えた。六十歳になれば医学部在学中の末っ子も独立する。そのあとは社会貢献をしようと思った。

「五歳のとき、福井地震で自宅の下敷きになったんです。すぐ上の兄と『奇跡的に助かった命なのだから、人のためになることをしよう』と誓い合った。それを果たそう、と」

あるとき、日本財団に勤務する後輩から、途上国の学校建設プロジェクトを取り仕切る人材を紹介してくれないかと相談された。

「神様がくれたチャンスだと思いました。心当たりあるよ、いま目の前にいるよ、って」六十歳で退職してすぐに、自宅を事務所にしてNPO法人を立ち上げた。そして東南ア

ジアの山岳地帯に飛んだ。少数民族が暮らす貧しい山村が点在する地域だ。

「商社流ですよ。まず現場を見なくっちゃ」

「私の学校」「私の村」

「ハコモノを建ててあげる」では意味がない。いくつもの山村を歩き回って谷川さんが考えたのは、村人といっしょに学校をつくることと、日本の教育現場への還元だった。

「貧しい地域では子どもは労働力。教育が必要なことを、村の大人たちと話し合っただけで、村の大人たちと話し合っただけで」

必要だと納得すれば、村人たちは学校を建てたくなる。日本国内の支援者からの資金で、その「村人たちの学校づくり」を支援する。現地事務局は置かない。東京の事務所も最低限のスタッフで運営して経費を節約し、その分、現地のNGOとの連携を密に取っている。

十五年間で三〇〇校近くを建設してきたが、壊れたりなくなったりした学校が一つもない。建設時に培った人間関係があり、さらにその後の交流を丁寧に行っているからだ。だから支援者も「自分の学校」という気持ちになる。

「私、ラオスに子どもが二〇人もいるのよ」と、うれしそうに語る老婦人もいるという。村の出身の子どもたちが奨学金を受けて師範大学を卒業し教師として村に戻るなど、未来につながるプロジェクトも進行中だ。

支援者は多彩だ。企業のCSR活動として、経営のモチベーションアップのために、自分の人生の記念に、戦争で迷惑をかけた地域へ

ベトナム中部で小学校の開校式



ベトナム中部で小学校の開校式



ラオス南部で村人といっしょに綱引き

元商社マン、 アジアの山村に 学校をつくる

今月の
顔

たにかわ ひろし
谷川 洋さん

認定NPO法人 アジア教育友好協会
理事長

1943年福井県竹田村(現・坂井市)生まれ。東京大学経済学部卒業後、丸紅株式会社に入社。鉄鋼部門から営業推進室長、業務部長などを歴任。50歳のときに妻の看病のために出世コースに別れを告げ、60歳で退職して「認定NPO法人 アジア教育友好協会」を立ち上げる。少数民族が暮らすベトナムやラオスの山岳地帯を中心に、学校建設プロジェクトを展開中。

著書『奔走老人 あなたの村に学校をつくらせてください』(ポプラ社)

認定NPO法人 アジア教育友好協会

<http://www.nippon-aefa.org>



の罪滅ぼしに……。決して財産家ではない「普通の人」が寄付を申し出る。最近、閉校になる高校の同窓会から「母校の名前を受け継ぐ学校をアジアに」と建設の相談を受けた。家庭裁判所からの電話で「そちらが遺贈先になっています」と一面識もない人の名前を告げられ、驚いたこともあった。

もう一つの活動の柱が、「出前授業」だ。都内の小学校に出かけて、東南アジアの子どもたちの話をする。七〇〇回以上実施し、今年度は東京都教育委員会の後援を得た。

話を聞いた小学生は、自分たちの暮らしをふり返る。そしてできることは何かと考える。小さなお手伝いのためた五〇〇円を持ち寄って、学校建設が実現したこともある。

「アジアの学校建設は、日本の子どもたちも変えていく可能性があるんですよ」

今年七十五歳だが、いまでも頻繁に現場に足を運ぶ。でこぼこの悪路を何時間も車で走って、ようやくたどり着ける村も多い。心配されても、「村にいる方が元気です。空気はいいし、食べ物はおいしいし、前向きな話は楽しいしね」と意に介さない。

走り続ける谷川さんの心には、いつも孝子さんの存在がある。

「妻に恥ずかしくない生き方をしたいですね」ちよつと照れくさそうに笑った谷川さんは、きつといまごろはまた出張中。冬が近づいてくる山岳地帯で、村人と語り合い、子どもたちの笑顔に囲まれているはずだ。

(取材・文 只木良枝)